

詩 集

海辺の野仏

池田玉子

大宮詩人叢書

池田 玉子（いけだ たまこ）

- 大宮詩人会会員
- 「林道」同人
- 詩集 風の向こう
- 住所 〒330 大宮市中川984-3

池田玉子詩集 海辺の野仏 〈大宮詩人叢書第3期⑭〉

平成2年3月20日発行

著 者 池田玉子

発行者 宮澤章二

発行所 大宮詩人叢書刊行会

大宮市上小町209（〒331）山崎方
電 話 048-641-2717 振替 東京 2-139230

編集者 山崎 馨・廣瀧 光

制 作 麗文社 大宮市三橋4-122-3
電 話 048-623-8417

印 刷 中沢印刷株式会社

定価 1,000円

詩 集

海辺の野仏

池田玉子

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

海辺の野仏
目次

縫う	8
父の手	10
一枚の絵葉書	12
とげ	14
白い靴	16
白木蓮	18
臨終	21
おはなしの行方 (一)	24
おはなしの行方 (二)	26
鋼を磨く少年	28
尋ね人	30

尊になつた男

32

老医師

34

太郎

36

英蔵

39

季節風

42

鯉の泪

44

松前の桜

46

海辺の野仏

48

あとがき

海
辺
の
野
仏

縫う

寝静まった 病室の夜更け

病に倒れた女が ひとり

目を閉じたまま

しきりに 針仕事をしている

右手の指が針を押し出し

左手を リズミカルに追いかける

糸こきをする

同じ仕種を 何度も繰り返す

生と死の間を彷徨いながら

女は 何を縫っているのだろう

——もういいのよ

わたしは　そつと

血の気の失せた手を　夜着にしまう

何十枚　何百枚着物を縫い

まわりの者に　多くの施しを与えた

女が　病床で最後に仕上げたものは

何だったのだろう

部屋の白熱電灯が　白壁を灰色に染め

女の　縮れた　白髪まじりの髪を

淡く照らしている

女が闇の中で縫っていたものは

この世に生まれ出る時

一度　破り去ったはずの

胞衣では　なかったか

父の手

幼い日

父は藍襖に跨がり

火消し半纏を 染めていた

節くれた手を 藍に浸したり 出したり

爪の中は 藍に染まり

あかぎれ膏葉が 見え隠れしていた

染め着けた 藍の布地は 水を潜り

赤い 三本の線が浮き上がる時

きびしく光る 父の目を見た

父の手は 藍を育て 藍に染まりながら
玉虫色に輝く あぶくの中で
生きている 藍を その手に 摺んでいたのだ

十人家族の暮しを支える 父の手は
正月を飾る 火消し半纏の 花を咲かせ
正月を祝う わが家の餅になり
わたしの 晴着になった

一枚の絵葉書

——いよいよ日本へ帰るのかと思うと

昂奮を覚えます

春一番の風に乗って 届けられた

ロワール河畔 古城の絵葉書

待ち侘びていた 異国からの便り

フランスの匂いの染みた 重いトランクを下げて

彼女はどんな姿で わたしの前に佇んだろう

日焼けして 黒ずんだ顔

語学修業の きびしく長い旅だったから

およそ 太っているとは思えない

習い覚えた言葉で 何人も友達が出来

お正月もクリスマスも ジーパン姿で過ごしたという
少しは 大人になれただろうか

この日を想い

異国の地に馴れますように

目的を遂げ 無事帰れますように と

とげぬき地藏に 日ごと祈って暮らした

長い歳月を 指折り数えてみる

—— 帰る日を 楽しみにしててください

終りの一行を 繰り返し口ずさむ わたし

その夜 鉢植えの桜草の置かれた

彼女の部屋で 返事を書いた

と げ

電話越しの　話し言葉の行き違いから

小骨程のとげが　昨夜から

胸の奥深く突き刺さり　ずきずき痛い

——言葉の行き違い　思い違いだ

何度も打ち消しては　言い聞かせるのだが

刻の経つにつれて　薄れるどころか

とげは　夢の中にまで入り込み　錆た声で

——日頃　ひとりよがりもよいところ　と

わたしを責めるので

とても眠ってなど　いられない

梅雨空は暗く 頭上に広がり

いつ晴れるとも知れない

少しぐらい 雨に打たれるのもいい

鎌を振り上げ 根こそぎ草を刈っていると

バラのそばの 草の叛逆

草が わたしの指を噛む

じくじく 流れ出る血をなめなめ

—— 待つしかない と決めて

庭を 大股に歩いていると

孫の置き忘れた 赤いシャベルに躓いた拍子

刺さっていたとげが すつととれた

夕刻 友から

—— 言い過ぎてごめんなさい と

電話が来る